## チャーチルを敬愛する村上水軍の末裔(上)

赤松正雄の読書録プログ Reading record blog of AKAMATSU Masao

2012年6月20日(水) No.210

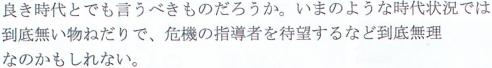
第二次世界大戦で危機に瀕した英国を救った指導者チャーチルは文字通り危機の指導者に相応しい。対独戦勝日に、バルコニーに立った彼は、集まった数万の群衆の歓呼に応えて、開口一番「神の祝福を。これはあなた方の勝利です」と叫んだ。国民と彼との信頼関係こそ成功の決定的要因だった。

外務省のキャリア官僚で今は米国公使を務める冨田浩司氏が勤務の傍ら書いた『危機の指導者チャーチル』は読み応えがある。好著との評判が高い。前半は、人格形成期の逸話。後半は、実際の戦争にあたっての取り組み具合。最後は危機における政治指導者のあり方が披露されている。

栴檀は双葉より芳しで、若き日の彼は競争相手をだし抜くために知恵の限りを尽くしている。母親にもその女性的魅力を駆使して息子のために頑張るように仕向けるというのだからただ事ではない。また、夫婦間の交流も尋常ではない。57年間の結婚生活で1700通という膨大な手紙が残っている。パグ犬と子猫ちゃんという愛称で互いに呼び合っていたとの手紙の中味も紹介されているが、読む方がつい恥ずかしくなってしまうほど。

この本の魅力は、至るところに名言が散りばめられているところにもある。チャーチルのものだけでない。二代あとの首相マクミランの言葉も貴重だ。若手の記者から、政権が倒れる要因は何か、と聞かれて「出来事だよ、坊や、出来事」と。予測せぬ「出来事」で政局が動くのは洋の東西を問わない。彼の「選挙というものは、野党が勝つものではない。与党が失うのだ」という言葉も味わい深い。チャーチルは大戦回顧録でノーベル文学賞をとっているほど文章構成力も卓越しているが、演説も際立っている。しかし、その背後には壮絶な努力がある。そのあたりを読み解くのも楽しみだ。

冨田氏は、「チャーチルのような規格外れの政治家が現代に再び現れることがあるか。 時代がそれを許さない、というのが結論である」というが、「チャーチルは時代の流れ にかろうじて『間に合った』政治家である」とも。ここでいう時代とは、いわゆる古き



©AKAMATSU Masao OFFICE



厄懐の指導有ナヤーナル

富田 浩司 著 新潮選書(2011-09-20 出版)

Photo by MKinokuniya BookWeb



日本よ、浮上せよ! 21世紀を生き抜くための具体的戦略 村上 誠一郎 +21世紀戦略研究室 著 東信堂(2011-11-30 出版)



衆議院外務委員会理事。公明党政調副会長。 元厚生労働副大臣、元衆議院総務委員長。

http://akamatsu.net info@akamatsu.net

## チャーチルを敬愛する村上水軍の末裔(下)

赤松正雄の読書録ブログ Reading record blog of AKAMATSU Masao

2012年6月21日(木) No.211

ただ、今は今でそれなりのスケールの指導者が出て欲しい。そう思う人は多かろう。そうした折りも折り、村上誠一郎+21世紀戦略研究室『日本よ、浮上せよ!』が手元に届いた。彼は自民党の次代を担うリーダーの一人。この本を一読していると、まさに序文にチャーチルの有名な言葉が目に飛び込んできた。「民主主義は最悪の政治形態と言える。ただしこれまで試されてきたいかなる政治制度を除けば」が紹介されている。敬愛する英国の政治家のものとして。ここでは、21世紀を生き抜くための具体的戦略が12の章だての下に提示されており、それぞれに興味深い。また、「人口爆発」と「資源の枯渇」を21世紀のキーワードとして解き明かす第二編は迫力がある。

彼の魅力は魂のこもった言葉を遠慮会釈なく発するところにある。今回の福島第一原発の事故対応で、この人ほど迫力ある言い回しで、政府を追及した政治家はいない。最終章で、生死を度外視して何かを成し遂げる心構えこそ大切だ、との吉田松陰の言葉を、自身の若き日に感銘を受けたものとしてあげている。この人なら、そういう心構えが身についているに違いないと思わせる数少ない政治家だ。

また、最末尾で、宮沢賢治の『農民芸術概論』における「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」をあげ、「リーダーや政治家、もちろん私にとっても、ずしりと重く響く言葉なのである」と結んでいる。この言葉、実は公明党の立党の頃のキャッチフレーズである「社会の繁栄と個人の幸せが一致する社会」と酷似している。宮沢賢治が法華経の著名な信者であることとも無縁でないかもしれない。こう書いてきて、村上氏の著書には、公明党に触れたところが全くないのに気づいた。画竜点睛を欠くと言うと、言い過ぎだろうか。

村上水軍の末裔たる彼の家の代々の教育方針が水泳のスパルタ教育で子どもを鍛えることにあったとのくだりは面白い。「私は十八代の当主となるが、物心つくと海に放り込まれた。今でも10キロメートル泳げと言われれば、すぐに泳ぐことができるはずだ」と。驚いた。彼は間違いなく国会議員随一の巨漢だ。120キロはあろう。とても、と思ったら、すぐあとに「いや、言いすぎた。浮くことはできるだろう」とあった。笑った。



http://akamatsu.net info@akamatsu.net

Photo by Kinokuniva BookWeb